

Bufo のケース(3 例)

Case1

メアリーは軽度の精神遅滞のある 42 才の女性である。

1997 年 4 月に姉（妹）と共に診察にやって来た。

主訴は癲癇様の発作である。

400mg のテグレトールを毎朝飲んでいて

その薬は約 3 年前からだ、それ以前は発作を抑えるために 4～5 種類の薬を飲んで

いた。テグレトールを含め、薬によって発作は抑えられなかった。

メアリーは子供の頃、ひどく激しい発作があった。

最近の発作は、左手から始まる引きつりを中心とするもので、左腕が上がり、さらに顔、特に口と目の周りに至る。

大抵は顔の右側である。

引きつりが脚に起こることは通常なく、このタイプの発作の間に意識を失うことはない。

今でも時折大発作があるが、その間に意識を失うことはない。

発作は 1 分間ほど続き、後に悪い影響は残らない。

発作は 14 才の初潮直後に始まった。

月のいつに起こっても発作は続き、生理によって悪化する。

主に生理前に悪化するが、生理直後にも幾分悪化する。生理中に起こることはあまりない。

ストレスがあると悪化する。

生理は定期的ではないが、1 ヶ月に 1 度以上はない。

メアリーはまた脊柱側彎症があった。

左手および両足首に非常に軽度の変形性関節症の病歴がある。

メアリーはとても愛想の良い、楽しい女性で、しきりに人を喜ばせようとしているようである。

待合室で会った時、彼女は腰掛けて文庫本を読んでいた。

何を読んでいるのか訊ねたところ、ロマンス小説だと答えた。

私の質問にすぐに反応し、自分から進んで情報を与える。

それも非常におしゃべりな感じで、大きな声で生き生きした調子で話すほどに、である。

本人も姉（妹）も詳しいことは知らないが、メアリーは早産で、ほとんど死んだ状態で生まれてきたようである。

知っていることと言えば、『子宮内で十分な酸素を取らなかった』ということである。

話し始めも歩き始めも遅く、学校ではいつも特殊教育クラスだった。

メアリーは母親と同居しており、母親は長い間具合が悪い。

彼女は実質的に母親の手足となって仕えている。

普段は穏やかだが、非常に頑固になって、何もしたくなるときには痙攣を起こすことさえある。

敏感ですぐに不快になる。

子供の TV 番組を見る。

メアリーが読むのは、主としてロマンス小説である。

3 つの本箱がロマンス小説の文庫本でいっぱいである。

私がコンピュータに症状を入力している間、彼女から注意が 1、2 分間反れたが、そのとき彼女はロマンス小説を開いて読み始めた。

その小説は『すごくきわどい』と言って微笑んだ。

彼女はマスターベーションはしないと言う。

メアリーにとって綴りを正しく書くのは難しいが、記憶力はよい。

すべての感覚、特に聴覚と視覚がわずかに足りないようである。

バランスもまた少しずれている。

歩いている間、または立っている間、わずかに左に傾く傾向がある。

Case2

ジョン、6 才の精神薄弱児。父親は大酒飲み。

母親は聡明で勤勉な女性だったが、私が子供の看護をしている間に肺結核で亡くなった。

上の 2 人の子供の健康状態はまずまずで、精神の強さも標準的だった。

そして、そのような家庭の子供にはよくある苦勞を抱えていた。

1889 年 1 月、ジョンの往診に呼ばれた。

ジョンには、1 日に 1 回から 6 回の癲癇様痙攣があった。

大抵は、夜間頻繁に起こるが、時には昼間起こることもある。

痙攣がない間は、はっきりとした舞蹈病の状態にある。

動きが非常に激しいので、怪我をしないように、彼のベビーベッドの側面にはパッドが当てられ、手には包帯が巻かれている。

彼を深いベッドの中に入れておくため、その上にかけたシーツをしっかりと結んでおく必要があった。

不随意の排便、排尿がある。

ジョンを食べさせることに比べれば、曲芸をしている間の軽業師に食べさせる方が容易だったろう。

うめき、唸り、つんざくような叫び声を上げるので、彼と同室になるのは嫌がられた。

多くの遍歴を経て、ピッツバーグホメオパシック病院の子供病棟に収容された。

時々食べるものは、ミルク、メリンズフード、またはオートミール粥だった。最初のうちは毎日やむを得ず入浴させられていた。

レメディをいろいろ試したが、明らかに何の効果もなく、Bufo30x を当初 4 時間毎に、その後朝晩 2 回投与したところ、改善が始まった。

6 ヶ月後には自分で食事が出来るようになり、1 音節の単語をたくさん言えるようになった。

同年齢の子供のように、立ったり座ったり歩けるようになった；
病棟内の他の子供の遊び、または他の子供が看護師に戸外運動に連れて行かれることに興味を持った；
3ヶ月間痙攣はなかった。
それから、別のホームに移されたが、そこでも健康状態は持続し、大いなる気付きと精神面の発達があった。

Case3

私が見たケースの一つは、ギリシャの少年のケースである。彼は、精神遅滞というわけではなかった。学校で2、3クラス遅れをとっていた。母親が彼を連れてきたのだが、彼がプレイボーイ（雑誌）を買っていたからだった。そして部屋の中でプレイボーイを持って座り、一日中マスターベーションをしていた。母親が言うには：「もちろん、学校ではあまり出来がよくありません。全く勉強しないのですから。あの子は忙しすぎるのです。」彼はまた、近所をうろついて覗き見をしていた。人に捕まえられたが、気にするわけでも、決まり悪い思いをするわけでも全くなかった。彼にとっては、これは正常なことのようだった。